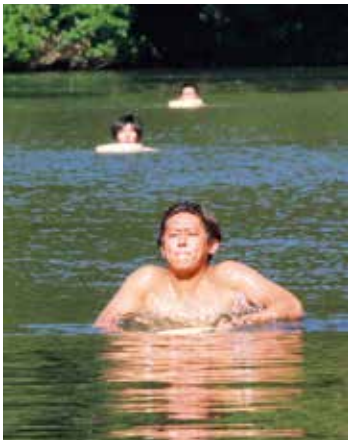
おまえざきの人 きらり輝く人

地域の伝統を継承する 桜ケ池遊泳団



PROFILE

現在23～37歳までの佐倉地区の氏子青年14人で結成されている。
地域に代々伝わる伝統ある団で、中には祖父や曽祖父の代から数世代にわたり関わる団員もいる。

伝統を受け継ぐ者たち

平安末期から佐倉地区の池宮神社に伝わる遠州七不思議の一つ「桜ケ池お櫃納め」をご存じだろうか。

勇壮なふんどし姿の地元の若者が、池の中央まで立ち泳ぎで赤飯が敷き詰められたお櫃を運び沈めて龍神に供える。数日後、沈めたお櫃が空になって水面に浮かび上がると、そのお櫃に込められた願いが叶うと伝えられている。このお櫃の送り手を務めるのが「桜ケ池遊泳団」だ。

親方を務める河原﨑太輔さんは「ふんどし姿を恥ずかしく思う人が多い中、団員たちは地域行事を受け継ぐことを誇りに思い参加している。そんな仲間と地域の1人として関われることに喜びを感じている」と語る。

遊泳団は祭りの3日前から泊まり込み、身を清め、祭りの準備や古式泳法の練習を行っている。この泳ぎ方が難しく、泳げず退団者が出るほどだ。「泳げないと退団はひどいように思えるが、水中でのトラブルは命に関わり、万が一も許されない」と厳しい一面を見せる。

お櫃を運ぶ様子を見た人から「池の中の道を歩いているんじゃないか」と言われることがあるが、河原﨑さんは「そう言って頂けるのがなによりの褒め言葉。見る人に道を歩いているように見せる泳ぎ方や隊列に気を配っています。地域の後輩たちが『いつかやってみたい』と思うような、心に残る活動をしたい」と熱い思いを語る。

次の世代へつなぐ

毎年実施されているこの行事も、年々参加人数が減ってきている。河原﨑さんは「全盛期には、全国から大勢の信者や観光客が集まり250を超えるえるお櫃が納められたそうです。年々数が減り本年は61櫃、このままでは長年続いてきた伝統行事が失われてしまうのではないか」と強い危機感を抱いているという。

地域の伝統を後世へつなぐ大切な役割を担う遊泳団。「私たちの活動を多くの人に見ていただき伝統行事に興味を持ってもらいたい」と話す。

来年はあなたの願いをお櫃に込めてみてはどうだろう。